

## ・支援者の会



### ■ 設立の経緯について ↑きぼう会事務所にて

水俣病胎児性小児性患者達は 30 歳代半ば、年齢に不釣り合いな急激な身体機能の低下が始まり、行く手に多くの不安を抱えていた。その最中、20 歳の頃から決意してきた「仕事をして地域で普通に暮らし生きる毎日」を実現するため、共同作業所ほっとはうす を 1998 年に創設。

それから 20 数年、水俣病被害者等の残された課題を真正面に据えた「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」が 2019 年 11 月に発足。共同作業所開設からこれまでの経緯と活動を共に取り組んできた人達が「ほっとはうす」の 20 数年の活動の「理念と志」を継承し、水俣病胎児性小児性患者等が、毎日を生きがいを持って過ごしていける場を支えるために患者会が設立された。2020 年 1 月には、この場を具体的に創り出し運営する事業体として「一般社団法人きぼう・未来・水俣」が活動を開始、二つの会は、車の両輪のごとくに以下の活動を現在行なっている。

1. 「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」「一般社団法人きぼう・未来・水俣」

を活動の基本に据えて、地域で普通に暮らすことに困難を有する人達への支援。

2. 水俣病の教訓を伝える講演活動

水俣病被害エリア＝水俣市、津奈木、葦北地区はもとより出水市内、熊本県内九州の各県をはじめ関東地域等に、「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を患者と共に歩んできた者との共同トーク形式で届ける講演活動。

3. 火曜日から土曜日までの毎日を日中活動日としている。

「仕事をする事」は、社会の構成員の一人として大人としての役割を果たすことであり生きがいにつながる作業と水俣病を伝える活動。

・水俣病を伝える活動・押花制作とその加工品として押花付き名刺作成・水俣病から環境を考えるエコバック創作  
☎看板娘さん



4. 水俣病胎児性小児性患者等や家族への地域生活支援を軸とする。

移動の困難を支援＝行動援護、医療が必要に応じて適切に保障されるための受診同行、安心した毎日のための生活相談、高齢化する家族の代行。

取り組んでいる課題について

- ・医療福祉の困難で厳しい現状でも、「施設ではなく地域で生き続ける」道を切り拓いていくこと。
- ・水俣病事件により奪われた人権の復権・胎児性小児性患者と同世代の水俣病の償いを求めて闘う患者達への支援。





きれいなで付けた髪にパンダナ姿。長い指で奏でるアコーディオンの音色は美しく、切なくもあった。ピアノやカメラにも通じ、芸術的な才能を感じさせた。水俣病に体をむしばまれ、困難な状況にあっても自分なりにできることに挑戦した人生だった。

1952年に水俣市の湯堂地区で生まれ、5歳で発症。祖父の故栄蔵さんは水俣病1次訴訟の原告団長を務め、一家11人で原告に名を連ねて闘った。20歳の時に勝訴して原因企業チッソから補償を受けた。ほかの小児性、胎児性患者と一緒に「仕事ばよこせ！」とチッソに訴えたが、仕事をもらうことはできなかった。従事したのは、し尿を運ぶ車を数える仕事だった。

30代半ばで車の運転免許を取得。10回以上も試験を受け、やっとの思いで合格した。「母親の通院や介助で、率先して送迎していた姿を覚えている」と、姪めの女性(48)＝津奈木町＝は振り返る。両親思いの優しい性格で、晩年の髪形は亡くなった父親の保さんをまねたものだった。

多くの人を引き付けたアコーディオンは、1次訴訟のころに支援者から贈られて始めた。年を重ねるにつれて体の自由は利かなくなったが、演奏は亡くなる直前まで続けた。リクエストを受けると、「いいよ」と気さくに応じた。童謡から映画音楽までレパートリーは幅広く、楽譜も見ずにアレンジを加えて弾く姿が印象的だった。

ケアホームで隣部屋だった胎児性患者の加賀田清子さん(67)は、毎朝テレビの音が漏れ聞こえてきたのが忘れられない。「今は静かで寂しい。好きなことをして生きていた栄一君は幸せだったと思う」と言う。

水俣病患者としてではなく一人の人間として当たり前の生活を送りたい。栄一さんは、財布の中に穴が開いて使えなくなった返納後の免許証をずっと入っていた。自力で獲得した、人としての誇りだったのだろう。

(上野史央里、鎌倉尊信)



水俣病慰霊式に、先に逝った弟・政秋さんの遺影を抱いて参列した渡辺栄一さん。 桑原史成撮影

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会／一般社団法人「きぼう・未来・水俣」

〒867-0051 熊本県水俣市昭和町2-4-8 西田ビル1F

Fax 0966-63-6741 Tel 090-7156-2298 katotakeko@gmail.com (事務局 加藤)

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会 東京支部

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-39-4-1 清水方 cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp (支部長 清水)

排水口樋門撤去反対行動

7.20 市・県に続き環境省にも要望書(→前号当欄)を届けました。 撮影: 桑原史成 ↓



8.16 樋門フラップを一旦撤収する工事を、現場で見守りました。 ↓



8.17 西味

作業を見守る胎児性水俣病患者の松永幸一郎さんと加賀田清子さん



水俣病

生活支援患者負担ゼロ

来年度から 知事、百間排水口視察

蒲島郁夫知事は12日、胎児性・小児性水俣病患者の生活支援として県が独自に補助する「地域生活支援事業」について、2024年度から利用する患者の自己負担分を軽減する考えを示した。実質ゼロとなる見通し。水俣市内での胎児性患者らとの懇談で説明した。

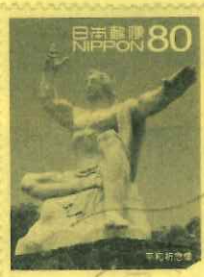
事業は、04年の水俣病関西訴訟最高裁判決で国と県の被害拡大責任が確定したことを受け、県が06年度に開始。家事援助や外出支援、入浴介助などが対象で、患者を支援する水俣市の社会福祉法人など6事業所が利用計画に基づいて補助金を申請する。費用の9割を国と県が助

成、残る1割を患者が負担することになっている。県水俣病保健課によると、22年度に事業を利用した患者は28人。障害者総合支援法の仕組みを準用し、患者の負担を事実上なくす。この日の面会で、胎児性患者らを支援する加藤タケ子さん(72)が「患者の1割負担を見直してほしい」と

要望。蒲島知事は「皆さんの声を聞いて自己負担の見直しの必要性を強く感じた。来年度から実施できるよう検討を進める」と明言した。蒲島知事は、水俣病の原因企業チッソが工場排水を流した百間排水口も視察。撤去した樋門の保存や活用方法について「患者団体の意見を参考にしながら県と市で検討する。水俣市民にも説明して決めていきたい」と話した。(久保田尚之)

(熊本日日新聞 9.13)





## 「まだまだ苦しんでいる」／身体機能低下／厳しい認定基準

長崎新聞 2023. 9. 1

母親の胎内で影響を受けた胎児性水俣病患者3人が長崎大を訪れ、学生らを前に講話した。水俣病の公式確認から67年経過したが、今も患者認定を巡る訴訟が続くなど問題は終わっていない。差別や偏見に苦しんだ過去や、身体機能低下への不安を吐露した患者たちは「まだまだ苦しんでいる人がいることを忘れないで」「二度と公害を起こしてほしくない」と語った。

講話した患者は、熊本県水俣市内の小学校などで水俣病の教訓を伝える一般社団法人「きぼう・未来・水俣」で活動する長井勇さん(66)、永本賢二さん(64)、松永幸一郎さん(60)。同法人代表理事の加藤タケ子さん(72)も患者を長年支援してきたことを説明した。

長井さんは水俣病が公式確認された翌年の1957年、水俣市に隣接する鹿児島県出水市で出生。生まれつき足の変形で歩けず、入院中の自身の映像がニュースで流れ、「水俣病患者」だと知った。ただ、それ以上を周囲に詳しく聞くことはなかった。「当時は偏見や差別を恐れ、水俣病をタブー視し、家族でさえ語り合えない。患者はそんな見えない縛りの中で生きていた」と加藤さんは時代背景を説明する。

当時の水俣市は原因企業チッソの発展に支えられ、工場で働く市民やその家族も多かった。永本さんの父親も従業員で、自宅は工場のそば。幼い頃は「補償金をもらえてよかね」と心無い言葉に傷つき、小学校では無理解の教諭から、病気の影響で震える足を物差しでたたかれた。悔しかった。認定のために会社と闘ってくれた父親には感謝している。チッソと切り離せない人生を歩んできた。

公式確認後の59年には、熊本大が水俣湾の魚介類に含まれる有機水銀が原因との説を発表した。それでもチッソは否定し、公害認定される68年まで、工場からメチル水銀を含む水銀が海に排出されたとみられる。

63年に水俣市で生まれた松永さんは「水銀が原因と指摘された時点で排水が止まっていれば人生は違っていた。国や企業が人命より経済を優先した結果」と憤りを隠さない。2010年ごろまでマウンテンバイクにも乗っていたが、足の痛みが急激に悪化し車椅子生活になった。松永さんは言う。「人は間違ったことをする。気付いたら立ち止まる勇気を持ってほしい。その思いを子どもたちには伝えていきたい」加藤さんは患者認定を巡る厳しい実情を嘆く。「差別を恐れて認定申請していない人が多く、発生時期には死産・流産する女性も多かったと聞く。患者数の全体像は分からない」

熊本、鹿児島両県によると、7月末現在、認定患者数は計2284人(熊本1791、鹿児島493)。申請

数は計2万8千件を超えるが、認定は1割にも満たない。加藤さんは、長井さんの母親が認定されなかった例を挙げ、「胎児性患者の母なのに認められない。理解できない判断だが、これは氷山の一角」と認定基準のあいまいさを指摘。制度の見直しを訴えている。

講話は8月30日、長崎大環境科学部の演習(担当・友澤悠季准教授)の一環で行われた。(熊本陽平)

## 横浜へ「伝えるプログラム」の契機

渡辺芙美子さん追悼メッセージ(抜粋) 加藤タケ子

横浜から、東京・水俣病告発する会の集いに度々はせ参じてくださった渡辺芙美子さんが8月15日早朝、逝去されました。大田区で小学校の教員をされていた渡辺さんは、私が横浜在住だった30年以上前に「水俣の甘夏」を共同購入してくださったお一人です。「甘夏」がきっかけで水俣病の現実に関わり、多くの患者が認定制度の壁に阻まれて未認定患者の状態に置かれていることに憤りを感じ、水俣と患者さんの様子を地域の中で発信してくれました。関東周辺で暮らす水俣病患者の存在がそれほど知られることがない時に、勤務される小学校の教室にその患者さんを迎えての授業をさせていただいたり、甘夏の売り込みキャンペーンで上京する水俣からの患者さん、支援者を受け入れ児童たちと交流の機会も作ってくれました。当時の水俣では、地元で起きた公害事件を学校で学ぶことはタブーに近かったそんなころでした。

芙美子さんは、当時、障がいを持つ児童との深い関わりを学級で懸命に取り組み、多くの荒波がありながらその荒波を水俣で苦勞されている患者さんの苦勞に重ね乗り越え、水俣から学ぶことにつながっていました。

この時に、私が水俣に移り住んでから25年間取り組んでいる胎児性・小児性患者さんとの共同トーク「水俣病から宝物を伝えるプログラム」の萌芽が生まれました。地域の中、最も身近な学校で、患者さんが水俣病の話というよりご自分を語り、患者さんの小学校時代のランドセルを持たされた笑える思い出を披露し、一方、他の児童から歩き方やしぐさをまねされる悲しい差別の現実が話されます。それでも、仕事をしたいと20代から希望＝やりたいことを決してあきらめないで、「ほっとはうす(今はきぼう・みらい・水俣に継承されている)」という共同作業所仲間たちの力で作り上げた物語を語る授業が行われるようになりました。

水俣病事件は終わりなく、私達の活動が厳しい局面の時も常に支え続けてくださった芙美子さんには言葉にできない感謝でいっぱいです。時々、水俣の空の上にも自由になった芙美子さんの魂を浮遊させてください。ご冥福をお祈りいたします。

2023年8月19日

## 東日本大震災：原発処理水の放出中止求める 水俣病被害者団体が声明

2023. 9. 1 毎日新聞地方版／熊本

東京電力福島第1原発からの処理水の海洋放出について、水俣病被害者9団体などがつくる水俣病被害者・支援者連絡会(熊本県水俣市)は31日、水俣市内で開いた記者会見で「水俣病を経験した私たちは看過できない」として中止を求める声明を発表した。声明は、有毒なメチル水銀を含む工場排水が海に流され水俣病を発生させた経緯に触れ「低濃度とはいえ海洋放出で放射性物質による健康被害を引き起こすことが懸念される」と中止を訴えた。

会見に臨んだ「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」会長で胎児性水俣病患者の松永幸一郎さん(60)は「水俣病で苦しむ私たちのような被害者を二度と出さないためにも海洋放出はすぐに中止してほしい」と話した。

(西貴晴)



の結論を出し対策の必要性を訴えたが、通産相（同）は根拠の乏しさを理由にうやむやにした。原因企業チッソによる汚染水の排出は68年まで続き、その年に国は初めて、有機水銀による魚介類の汚染が原因と認めた。

経済成長のために犠牲者を出してもいいという国の体質は変わっていない。2002年に国の地震調査研究推進本部が三陸沖を含む地域での地震発生の可能性を指摘したのに、堤防整備などお金がかかる津波対策を講じなかった。9年後に東日本大震災は起きた。水俣病患者の被害者救済法は対象地域や出生年で対象を線引きしている。同じように、広島原爆の被爆者認定は、放射性物質を含む黒い雨を浴びた人を原爆投下時にいた場所で線引きした。場所に関わらず認めたのは21年になってからだ。そういう危機管理の失敗を、国は繰り返している。

水俣病患者や被災者を「よその人」でなく「自分の家族」のように考えるものの方がいい。そうすれば人ごとと思えなくなる。

## ■水俣病対応、評価と批判 蒲島県政16年に患者ら

「直接向き合ってくれた」「国の言いなりになった」 2023.12.10 熊本日日新聞朝刊

熊本県の蒲島郁夫知事が6日の県議会で、来春の知事選不出馬を表明した。水俣病問題を「私の政治の原点」と明言してきた蒲島氏。4期16年の取り組みに、患者や支援者からは「寄り添ってくれた」と声が上がると同時に、水俣病特別措置法に基づく未認定患者救済策への対応や、未実施の不知火海沿岸の住民健康調査を例に「国の言いなりだった」とする指摘もあり、評価は分かれた。

蒲島氏は2008年4月の知事就任後、定期的に水俣・芦北地域を訪れ、胎児性患者らとの交流を続けた。新型コロナウイルス下の中断を挟み、今年9月には約5年ぶりに現地を訪問。来年度から胎児性患者らの生活支援事業の自己負担を軽減する方針を明らかにした。

原因企業チッソがメチル水銀を流した百間排水口（水俣市）の樋門撤去の動きが表面化すると、県は胎児性患者らの要望を受けて調整に乗り出し、「現地保存」の方向で決着した。

胎児性患者らを長年支援する加藤タケ子さん（73）は「患者に向き合ってくれ、何が求められているかを考えてくれる人だった」と評価する。

「知事は水俣病の教訓を次世代に伝える重要性を強調していた」と水俣市立水俣病資料館語り部の会の緒方正実会長（65）。「水俣病を県政の重要課題と位置付け、患者に寄り添ってくれた。できればもう1期続けてほしかった」と残念がった。

蒲島氏が成果を強調したのが、1期目の09年に議員立法で成立、施行された水俣病特措法。6日の県議会答弁でも「与野党国会議員に直接交渉し、双方の橋渡しを務めることで法成立につなげた」と胸を張った。

水俣病被害者の会の中山裕二事務局長（70）は「知事が特措法成立に尽力し、約5万人が救済対象となった点は評価できる」としつつも、被害者側が求めた救済申請期限の撤廃について「環境相の決断を尊重する」と国に追従した知事の姿勢を批判した。「申請締め切りが今も続く集団訴訟の火種となった」と中山事務局長。患者認定業務を巡り13年に県が敗訴した最高裁判決後の対応も挙げ、「知事が国の対応に反発し、認定業務の返上を持ち出す場面もあったが、環境省の新通知が出るとあっさり引き下がり、国の言いなりになった」と指摘した。

特措法に規定された不知火海沿岸の健康調査は、施行から14年たった今も実施されていない。チッソ水俣病患者連盟の高倉史朗事務局長（72）は、04年に潮谷義子知事（当時）が県の独自調査を国に提案したケースを引き合いに「蒲島氏も県のトップとして積極的に関わらなければならなかった。結局、国の顔色をうかがい、国が許した範囲でやる県のスタンスは変わらなかった」と話した。

（上野史央里、久保田尚之）

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会／一般社団法人「きぼう・未来・水俣」

〒867-0051 熊本県水俣市昭和町2-4-8 西田ビル1F

Fax 0966-63-6741 Tel 090-7156-2298 katotakeko@gmail.com（事務局 加藤）

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会 東京支部

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-39-41 清水方 cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp（支部長 清水）

# きぼう 未来

水俣病胎児性小児性患者家族支援者の会 2024 新年

2023.11.25 東京シンポジウム報告

（鈴木紀雄 記）

## 胎児性小児性患者会の近況

松永幸一郎（患者会代表） 加藤タケ子（患者会事務局）

コロナ期間は、オンラインでの報告が続いたが、5月に続き、現地からの上京を得ての報告となった。

### ■患者会の近況

松永幸一郎 今、私は認定ランクの変更に挑んでいるが、4回却下され、来年5回目の申請を予定している。水俣病胎児性小児性患者会の活動としては、福島原発処理水排出反対や戦争反対のスタンディング行動を行ったり、大学生が来ての交流などに取り組んでいる。

加藤タケ子 胎児性小児性患者の挑戦のひとつとして、ランク変更の取り組みがある。松永さんの事例は冰山の一角で、総務省・公害等調整委員会の聞き取りでさらに痛めつけられている実態がある。

私たちは「水俣病から宝物を伝えるプログラム」を23年間行っている。昨日は、横浜元町の山元小学校の5年生に授業をした。熱心な先生で、事前授業のまとめ黒板も良かった。こちらからは教科書からはみ出した情報を提供したり、アドバイスしたりした。

松永 今回の上京では、将棋会館で初段から二段への昇段に挑戦するので、この小学校での授業は一回断った。でも、結局一泊増やすことで対応した。

加藤 「きぼう・未来・水俣」の記録などのまとめの冊子が出来上がり、東京に持って来ていたのにホテルに置いて来てしまった。昨日の授業は、前半が松永さんとの共同トーク、後半は、あらかじめ作業部品を用意しておいたエコバッグ作りのワークショップで、全体で2時間近く行なった。

もう40年近くも前に、水俣病が現地でタブーだった時代に、市立袋小学校の梅田先生が頑張って水俣病を伝える授業に取り組み始めたのがスタートだった。私たちの活動もコロナ禍やいろいろなゴタゴタで危機の時もあったが、今は元どおりに取り組んでいる。昨日も、子供たちに何か残るような授業ができたのではないかなと思っている。子供たちからは、「苦しかったことの多かった水俣で、なぜ『きぼう・未来』なのか?」という良い質問もあった。終了後、夜は横浜中華街で楽しませてもらった。

水俣では、週1回ほどのペースで多くの大学生、先生などの訪問客が訪問、留学生も来ている。夜市で来た子供たちが赤木先生のピアノを弾いたり、オセロをやったりして楽しんでいる。小・中学生の社会体験やコンサートも。

誕生会では明水園の人たちとZOOMでお祝いした。

胎児性患者仲間が入居している明水園は今も外出制限があり、長らく園に閉じ込められている状態だ。園側は、コロナ禍のため、外より明水園の方が安全との立場を取り続けている。現在、「きぼう会のメンバーや職員が抗原検査をして大丈夫だったら明水園からこちら（市内にある「きぼう未来」事務所）に来られないか、と提案しているところ。

（◆スクリーンに、金子雄二さんの姿が投影されて）

金子雄二さんは、医療的ケアが必要になったが、近々退院する。経管栄養を行っていて、誤嚥性肺炎の危険性を低減するために気管切開をしたので、痰の吸引が楽になった。本人は、グループホーム「おるげ・のあ」に戻ると言っている。（無二の友人であるスタッフの）関根浩さんは今コロナ感染から回復中だが、水俣現地の様々な水俣病医療・福祉資源が——厳しい交渉を経てだが——24時間対応でいろいろと動いてくれている。

### ■百間排水口樋門の保存活動

加藤 次に百間排水口の保存問題について。大雨の7月1日に、日本山妙法寺・水俣道場の西川大さんという僧侶が足場に座り込みをして、樋門の撤去が延期になった。彼とは時間限定の座り込みを一緒にやったりもした。県知事に対して、市民とともに「保存を」と要望した。

（◆樋門の写真投影） この4枚の樋門は修復・保存から文化財へと進んでゆけたらいい。ここからの排水が水俣病を発生させ、ここの排水が「ネコ実験」に使われたのであって、近代の負の遺産というべきもの。





（◆**樋門が外された排水口や内側のアーチ構造の写真を投影**） 廃水口全体を公害遺跡群としてとらえる世界初の取り組みとして、日本考古学会の専門家等にフィールドワーク調査をしてもらった。

廃水口のアーチ構造はもともと熊本の石積み文化の現れであり、石橋だったものを利用した可能性もある。周りを覆っているコンクリートや鉄板を取り除くと石橋そのものが出て来るのではないか？もしかしたら文化庁が位置づけるような貴重な遺跡かも知れない。

\*\*\*\*\*

## メンバー プロフィール



（シンポジウム配布資料より転載 写真も）

### 松永幸一郎

（1983年胎児性水俣病認定患者）1963年6月29日 水俣市丸島生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会代表、(一般社団法人) きぼう・未来・水俣メンバー 20歳の時、胎児性水俣病認定。水俣病の原因がチツソの排水に起因することが明らかになった1959年からさらに4年後の出生。「チツソが排水をその時に停止していたら」との悔しい思いを抱えている。3キロの道程を自転車＝マウンテンバイクで「ほっとはうす」に通っていたが、足の痛みがひどくなる。2010年頃から車いすを利用するようになる。日本将棋連盟公認初段の腕前、肥後名人戦での対局の経験を持つ。

### 長井 勇

（1963年頃胎児性水俣病認定患者） 1957年2月11日 鹿児島県出水市前田生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会副代表（一社）きぼう・未来・水俣メンバー 足の変形が激しく生まれつき歩くことはできなかったが、車椅子を足代わりにどこへでも出かける行動力の持ち主。『僕の宝物は12歳で小学校に入学できたこと』と語り続けてきた。2010年11月から身体機能が急激に低下し全身の筋力が低下。周囲の励ましとリハビリで少し改善。厳しい状況の中でも、自立精神を維持し続ける。一人で行動できる力の回復を目標にしている。

### 永本賢二

（1963年頃胎児性水俣病認定患者）1959年9月1日、水俣市梅戸生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会副代表（一社）きぼう・未来・水俣メンバー 1997年頃より水俣病を伝える活動に参加。2003年と2012年、水俣病犠牲者慰霊式において、水俣病患者遺族代表として「祈りの言葉」を述べる。水俣病資料館では語り部も務める。水俣病や障がいを理由にいじめられたとき励まされたのは、チツソ梅芦港のクレーン。辛い経験のなかにも詩的なセンスとユーモアを交えて語る。

### 金子雄二

（1962年胎児性水俣病認定患者）1955年8月26日、水俣市明神生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会員（一社）きぼう・未来・水俣メンバー チツソ百開排水口の近くに暮らす一家は、兄が3歳頃、父が1954年4月に発病。家族は全員水俣病認定患者。父親は彼が生まれる3ヶ月前に奇病＝劇症型水俣病で26歳で死亡。38歳頃より急激な身体機能の低下で歩行が困難になり、車イスが必要となった。20歳から仕事の場を求め、40歳で「ほっとはうす」を仲間たちと驚設し『仕事と地域生活の拠点』を粘り強く実現させた。「ほっとはうす」での仕事は、水俣病事件を伝える活動、押し花や名刺等のラミネー ター加工、エコバッグのオリジナル印押し。

### 加賀田清子

（1962年胎児性水俣病認定患者）1955年8月16日水俣市月浦生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会員（一社）きぼう・未来・水俣メンバー 7歳から25歳まで病院や明水園で暮らす。そのため家族と一緒に暮らした記憶が乏しい。その悲しみ、淋しさは今でもなく

ならない。だから、「私よりもっと重症の苦しんでいる胎児性患者がいる、その人達の役に立ちたい」が信条。さらに、水俣病による機能障害で言葉を発することのできない胎児性患者の声なき思いを感じ取り、その思いを肩担に伝える役割を自らに課している。30代後半（2000年頃）より身体機能の急激な低下で歩行が困難となり、車イスでの移動を余儀なくされている。だが、「もう一度歩くことができれば、また、仲間の車いすを押してあげたい」と、他者への深い思いやりが光る。

### 故 渡辺栄一

1952年6月22日生水俣市湯堂生まれ。（2023年6月15日 死去 享年70歳 合掌）水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会員（一社）きぼう・未来・水俣メンバー 1958年頃発症の小児性水俣病認定患者。1958年生まれの弟は胎児性患者。一家3代、家族7人が水俣病被害を受ける。祖父は水俣病第一次訴訟の原告団長、渡辺栄蔵。2009年以降、母と弟を立て続けに死亡。7人家族のたった一人の生存者だった。40代から身体機能が低下し、杖を使っても歩くのが困難に。手先の器用さと優れた音感が自慢、ピアノとアコーディオンを奏でる。

### 加藤タケ子

1950年10月3日、東京都府中市生まれ。水俣病胎児性・小児性患者・家族・支援者の会事務局長（一社）きぼう・未来・水俣 代表理事 「ほっとはうす」の元施設長、今はきぼう・未来・水俣で活動中。1988'89年、未認定患者らのチツソ水俣工場前での座り込みに参加、その後、水俣に移住。92年「カシオペアの会」を胎児性患者と共に結成し 後の「ほっとはうす」の発足につなげる。患者さんに寄り添い、共同トークで「水俣病から宝物を伝える」ことをライフワークとし、声がかげられれば世界のどこへでも出かけていく。

## 報道

### ■胎児性患者の加賀田さん講演

「患者、ここに」伝えたい 水俣・福岡展 公害病の理不尽 訴え 2023.11.6 西日本新聞朝刊 公害の原点とされる水俣病を、展示と患者や識者の講話を通して考えてもらおうと、福岡アジア美術館（福岡市）で開催中の「水俣・福岡展」（水俣フォーラム主催）。企画の一つとして、胎児性患者の加賀田清子さん（68）がこのほど、「私と水俣病」と題して講演した。自由に動き回るのは難しく、言葉も明瞭ではない。そんなわが身をさらしてまで、公害病の犠牲に遭った理不尽さを訴え続けるのは「私たちを忘れないで」という思いがあるからだ。（西田昌矢）

加賀田さんは1955年、水俣市月浦に生まれた。母親のおなかでメチル水銀の影響を受け、62年に胎児性患者と認定された。幼少期から、治療やリハビリのため家族と離れて暮らした。

16歳の時、市内の患者療養施設「明水園」に入所。当時は自分の足で歩き、発語もはっきりしていた。重症患者の聞き取りにくい言葉を「通訳」することも。明確に聞こえなくても「心の言葉がある」。身ぶりや表情で、言いたいことが分かった。

成人の日。両親が用意した晴れ着に身を包み、化粧をして写真を撮った。式典には参加できなかった。市から案内状が届かなかった。「私たち胎児性の患者も水俣に住んでいる」。そう伝えたかった。

30代後半は症状が悪化し、車椅子なしで歩けなくなった「一番つらかった時期」。そんな中、96年に都内で開く第1回水俣展の関連行事で胎児性患者として話してほしいと打診があった。加賀田さんの父は当初「見苦しいから」と反対した。差別を恐れていた。加賀田さん自ら、主催者とともに説得し、認めてもらった。 当日。自身と切っても切り離せなかった水俣病の被害を伝える。大役を果たせることで胸がいつぱいになった。涙を流して人前に出たことを覚えている。

患者の高齢化は進む。共に被害を訴えてきた仲間は年々少なくなる。加賀田さんは今回、亡くなった一人の遺影をステージ上のテーブルに置き、講演に臨んだ。終了後、加賀田さんは「水俣病が忘れられないよう、患者の私たちがここにいるということを元気なうちに伝え続けたい」。もちろん、語るができなくなった仲間の分も。水俣・福岡展は11月14日まで。

「家族の命のように考えて」 「国の危機管理は失敗続き」 作家・柳田邦男さん講演要旨

加賀田さんが講演した日には2005年～06年に環境相が設置した私的機関「水俣病問題に係る懇談会」の委員を務めたノンフィクション作家、柳田邦男さん（87）さんも、水俣病患者の救済が長引く背景について語った。要旨は次の通り。

\*患者がなぜこんなに苦しい状況に置かれたのか。日本の行政や企業の姿勢に根源的な理由がある。私はそれを、懇談会の委員を務めた時に実感した。 水俣病は1956年に公式確認された。59年、厚生省（当時）の部会が「原因は有機水銀」と



のはもっぱら私の仕事の都合だ。

1月11日にまず私が水俣に行った。そして、「きぼう・未来・水俣」の皆さんに盛大な歓迎会を開いてもらい、加賀田清子さん、加藤タケ子さん、関根浩さん、松永幸一郎さん、永本賢二さんらと交流し、スーパーホテルに泊した。翌12日には長井さんと福岡経由で東京に来て、私が演出を務める演劇グループCUATRO GATOSのメンバーと合流し、近況を報告し合った。CUATRO GATOSのメンバーとして毎年、長井さんと交流していた田中紀子さんが亡くなってちょうど1年の日だった。たまたまだが、泊まったホテル・西鉄イン新宿が田中さんの亡くなった東京医科大学病院の真向かいだった。長井さんは、自分がお金を出して買ったお菓子をホテルの一室でバリバリ食べる田中さんに向かって「1人で全部食べないで！」と叱ったことをケタケタと笑いながら懐かしそうに語った。

### インスリン注射が欠かせない

13日は朝一番に千葉在住の弟の長井和秀さんに来てもらい、インスリンの注射を打ち、それから和秀さんと別れて、CUATRO GATOSの宮下直紀さんと私と長井さんの3人で上野動物園に行ったのだが、結局は動物園には入らず、上野公園を散策し、アメ横で昼食をとっただけだった。午後はまた和秀さんに車で迎えに来てもらい、神楽坂にある叔父さんの家を訪問し、1時間ほど昔話した後は、御茶ノ水で首都圏の水俣に心を寄せる方々が開いてくれた長井さんの歓迎会に参加した。

### 長井さんとの握手券

この会では余興としてカレンダーなどが当たる福引をしたが、十数枚の中に主賓の長井さんと握手できる券が2-3枚混ざっていた。自身の引いたくじが握手券付きだった長井さんは、自分の右手と左手をつないでみせ、皆を笑いに包んだ。真剣に悩む性格の一方で、当意即妙のユーモアも見せてくれる長井さん。

翌14日はまたまた和秀さんに迎えに来てもらい、羽田空港まで送っていただいた。そうして、私と2人で羽田を発ち、やはり福岡経由で水俣まで送っていき、新水俣駅で加藤さんにもろもろを引き継ぎし、私は東京にトンボ返りしたのであった。

こうして文字にするとかなりの強行スケジュールのように思われるかもしれないが、実際には、長井さんはそれなりにゆったりと東京を楽しむことができたのではないだろうか。

長井さんにとって、今回の東京旅行が1年に1回、「胎児性水俣病患者」という立場から離れ、息抜きする機会になったのだろうか。しかし一方で、長井さんには胎児性水俣病患者としての経験を「宝物」として、矜持をもって生きてほしいという願いも私にはあり、長井さんからまだまださまざまなことを教えてもらいたい。

長井さん、これからもよろしくお願ひいたします。

(しみず・ただし)

水俣病胎児性小児性患者・家族・  
支援者の会 東京支部長/  
チッソと国の水俣病責任を問う  
シンポジウム実行委員会)

お茶の水の中華店前

撮影 桑原史成

2024. 1. 13



水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会／一般社団法人「きぼう・未来・水俣」

〒867-0051 熊本県水俣市昭和町2-4-8 西田ビル1F

Fax 0966-63-6741 Tel 090-7156-2298 [katotakeko@gmail.com](mailto:katotakeko@gmail.com) (事務局 加藤)

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会 東京支部

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-39-4-1 清水方 [cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp](mailto:cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp) (支部長 清水)

## 水俣病認定患者の「ランク付け」改定問題

水俣病補償協定50年 加齢に伴う変化 対応を 患者ら訴え 2023.7.8 読売新聞西部朝刊

水俣病の認定患者が原因企業チッソ（東京）と結ぶ補償協定は9日、締結から50年となる。医療費や毎月の手当が支給され、症状が悪化した場合は補償を拡充する仕組みだが、変更に伴う審査基準が不明で、患者や支援団体は「審査が実態に見合っていない」と訴える。加齢による変化に対応していないとの批判も続いており、患者団体はチッソに制度の見直しを求めている。（白石一弘）

水俣市の小児性水俣病患者、渡辺栄一さんが6月15日、心筋梗塞（こうそく）で亡くなった。70歳だった。3段階ある補償ランクは一番上のAで、2020年12月にBから上がったばかりだった。

渡辺さんは同市湯堂で生まれ、祖父母と両親、きょうだいの家族7人が認定患者だった。祖父・栄蔵さんは1973年3月、チッソの加害責任を初めて認めた第1次訴訟の熊本地裁判決で原告団長を務めた。

補償協定はこの1審判決が確定した後、被害者や患者団体がチッソ側との交渉を重ね、同年7月9日に合意した。その後、熊本、鹿児島県に認定された患者はチッソと協定を結び、症状の重さによってA～Cの補償ランクで分かれ、1人当たり一時金1600万～1800万円や医療費などを受け取る。ランクが高いほど補償は手厚くなる。

「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」によると、渡辺さんは70年にCと認定され、2001年にBとなった。10年にはAへの変更申請が一度棄却されている。加藤タケ子事務局長（72）は「もう少し早くランクが上がれば、手厚い補償が長く受けられた。違った人生になったはず」と話す。



ランク変更の認定の壁は厚い。20歳でBとなった胎児性患者、松永幸一郎さん（60）は過去4度、Aへの変更申請が退けられた。「日常生活に著しい支障はない」という理由だ。

補償協定には「上位のランクに該当するような変化が生じたときは変更を申請できると明記しているが、受け付ける委員会は審査基準を公表していない。松永さんは10年以上前から車いす生活を続けており、タクシーを使う機会も多い。5度目の申請を準備中だ。

両県の認定患者は3月末現在で2284人。存命者246人の年齢は平均80・2歳。加藤事務局長は50年前は加齢による変化を考慮していなかったとして、「身体機能の明らかな衰えがあるならランクを上げるべきだ」と訴える。

協定には「将来の健康と生活を保障することに最善の努力を払う」「範囲外の事態が生じた場合は交渉する」といった文言もある。1次訴訟の原告らでつくる「水俣病互助会」の谷洋一さん（74）は「加害者のチッソが自発的に拡充に取り組むのが本来の姿だ」と強調した。

写真：昨年の東京シンポジウムでの松永幸一郎さん（撮影 森山善郎）



# ＜水俣病から宝物を伝えるプログラム＞ テーマ曲「海」

# 長井勇さんとの旅路 水俣—東京—水俣

清水 唯史

テーマ曲「海」

作詞 1984年録小5年生  
作曲 口脇利雄・中村文美

一 海は きれいだ  
とても きれいだ  
海は ひろ大な  
どこまでも 続いている

二 海は 心を  
なごませてくれる  
海は 勇気を  
あたえてくれる

三 海は 命を  
生み育ててきた  
海は 私たちの  
大切な たちからの  
海は 私たちの  
大切な たちからの

作詞 1984年録小5年生

作曲 口脇利雄 中村文美

うみはきれいだ  
とてもきれいだ  
うみはひろ大な  
どこまでも続いている

うみは心を  
なごませてくれる  
うみは勇気を  
あたえてくれる

うみは命を  
生み育ててきた  
うみは私たちの  
大切なたちからの  
うみは私たちの  
大切なたちからの

## 解説

加藤タケ子

「水俣病を伝えるプログラム」のエンディングには、歌声が響く。その歌声がたった今聞いた言葉に重なり、メロディーとなって心に定着する。語り手と聞き手の声が重なる時、心の中に生命への深い思いがあふれ熱い涙がこぼれることもある。水俣病の多発地区の小学校で1984年に水俣病を学んだ5年生が作った「海」を私達はこうして歌い続けている。

当時の水俣市の学校教育現場では、水俣病に真正面から取り組むことが、はばかれていた。しかし、困難を恐れず取り組んだ一人の教師によって切り拓かれた水俣病学習が子どもたちの感性を揺さぶり、そこで学んだ人権と生命を構成詩で表現してこの歌ができた。

被害地域に向けられる差別を、水俣病を学ぶことで乗り越える—愛と情熱あふれる教師の実践は、そういう力を子どもたちに授けた。その学びの成果が、時代を超え、水俣病を伝える患者達の活動を支える力ともなっている。

事件の受難者である胎児性患者たちが語ってくれた水俣病は、悲しきや辛さに満ちた過酷な体験で「もし、私だったら」と想像力を及ぼせるようなリアリティがある。それでも、語りの中に笑顔がはじけ、人生の自慢話があり、「生命=いのちの輝き」がある。人間について深い思いを重ねた言葉が子どもたちに届く。「海」の歌は、水俣病から学んだ確かな記憶を何時かまた、よみがえらせるメロディーの役目も担っている。



2月、知人の送別会で花束を贈る清子さん。この日も「海」が歌われた。

※2006年11月「撮岡人権フェスタ」で“人権を伝える日本の100曲”に推薦された時の、パネル展示メッセージをもとに要約しました。(編集部)

## 出水市で生まれ、水俣市湯之児(ゆのこ)で育つ

長井勇さんは水俣病が公式確認された翌年の1957年2月に鹿児島県出水市で生まれました。生まれつき足の変形で歩くことができず、入院中の自身の映像がテレビニュースで流れたことで、胎児性水俣病患者であることを知った。8歳のときだった。

そして、12歳で水俣市立第一小学校湯之児分校に入学、21歳で卒業する。この分校は、長井さんが幼少期を過ごした湯之児リハビリセンター内に設けられた学校だ。年齢で分かる通り、数年の“就学猶予”を経ての入学と卒業だが、仲間と過ごした記憶は長井さんにとって、とても大切な思い出となっている。6年生のとき、桜島に遠足へ行ったことなどは特に印象に残っているという。ただ、一方で仲間であるはずの脳性麻痺の子どもからいじめを受けたことは悔しい記憶となっているとも。

## 映像への関心

こうしたさまざまな思いを醸成した小学校時代があったから、湯之児分校が閉校する1999年に『さようなら湯之児分校』というビデオ作品を作成することになる。撮影は支援者が行っているが、先生たちなど関係者に長井さん自身が車イスを駆使して出向き質問取材をするというユニークで貴重な記録だ\*。編注\*相思社と東京告発する会が録画を保存している。

映画『MINAMATA』でユージン・スミスさんからスチール写真の手解きを受ける少年は長井さんがモデルだ。幼いころから写真に関心を持ち、成長した長井さんはスチールからビデオへと関心が移っていった。私が2006年に演劇を通じて出会ったときには、上演をビデオで撮影してもらった。

しかし、そうしたライフワークともいべき創作活動も身体状態の悪化により、徐々に諦めざるを得なくなる。好奇心旺盛で人一倍活動的だった長井さんが自力ではいろいろなことをできなくなってしまったのである。気持ちは若いが還暦を過ぎた長井さんはいま、グループホーム「おるげ・のあ」に居住している。週に1~2回は「明水園」の敷地内にある「潮風」を利用し、毎日午前は「ほっとはうす」のデイケアを利用し、午後は「きぼう・未来・水俣(胎児性小児性患者家族支援者の会)の事務所」で仕事をしたり、伝えるプログラムに参加。時には「遠見の家」を訪問したりという生活だ。「水俣病から宝物を伝えるプログラム」では、松永さん、永本さん、清子さんと共に常連メンバーとして活躍している。

## 旅を求める動機

そんな長井さんが「胎児性水俣病患者の長井勇さん」と呼ばれることをあまり好んでいない。自立した個人としてみてもらっていないような気分になるからだという。本記事では長井さんを胎児性水俣病患者として紹介せざるを得ないが、不如意な身体はいつでも長井さんに自身が胎児性水俣病患者であるという事実を突きつけてくる。現在の長井さんは胎児性水俣病患者としての自身に常に向き合わざるを得なくなっているのだと思う。

そんなことが長井さんの心理状態にも影響しているのか、近年は電話で「水俣から離れたくない」と口にすることも度々ある。長井さんが身体的存在であることから決して逃れられないが、胎児性水俣病患者としての社会的な立場から一休みすることは、水俣を離れることによって多少は実現できるからなのだろう。

水俣は小さな都市だから、その地域共同体で暮らしている限り、胎児性水俣病患者であるという事実から離れることはできない。しかし、東京に来れば、誰も長井さんのことを胎児性水俣病患者としてみたりはしない。匿名性のなかで埋もれることが可能となるのだ。それは長井さんにとって、時に必要な安らぎなのかもしれない。

## たびたびの東京ツアー

そんなこともあり、私は2012年2月から長井さんの東京旅行につき合っている。2月というのは長井さんの誕生月であり、1年に1回、水俣から離れる機会になっているのだ。その機会がコロナ禍で途絶して以来、今年は久しぶりの東京観光となった。2月ではなく、1月になった





5. 26-28

- ・環境省に百間保存申し入れ
- ・中大法学部で水俣病授業
- ・川田龍平議員事務所訪問



6. 5-6 ・国会院内集会で報告 ・公害等調整委員会にランク変更申し入れ



\*次号以降の記事案 5/1 慰霊 夜の集い 5/27 中大授業・学生感想 7/8 環境大臣の再訪問 7/20 年次総会  
吉井元市長への追悼寄稿 Aさん公調委申請資料 松永さんに将棋免許 東京からお中元 押し花

発行 2024年7月25日

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会／一般社団法人「きぼう・未来・水俣」

〒867-0051 熊本県水俣市昭和町2-4-8 西田ビル1F

Fax 0966-63-6741 Tel 090-7156-2298 [katotakeko@gmail.com](mailto:katotakeko@gmail.com) (事務局 加藤)

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会 東京支部

〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-39-4-1 清水方 [cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp](mailto:cuatro-gatos@pop21.odn.ne.jp) (支部長 清水)

5.26 チツと国の水俣病責任を問うシンポジウム (於 東京)

記録 鈴木 紀雄

水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会 松永幸一郎 加藤タケ子

**加藤** 2019年3月に「ほっとはうす」のすべての運営から退き、11月に胎児性小児性患者に特化した水俣病の課題に取り組むために「水俣病胎児性小児性患者・家族・支援者の会」をスタートさせた。さらに、患者の質の高い暮らしを支える日中の活動の場として、地域で暮らすことを目的に、一般社団法人「きぼう・未来・水俣」を作り、活動している。そこでは、「ほっとはうす」時代から継続して水俣病を共同トークで伝えている。この「水俣病から宝物を伝えるプログラム」は、患者の生きがいにも重なっている。

**松永** 毎度おなじみの、患者会代表の松永です。本当は永本賢二さんが来る予定だったが、最近、体調がすぐれないということでバトンタッチして私が来ました。

**加藤** マイクオフ問題では環境大臣が謝罪したことが大きいと思っている。また、胎児小児性患者の暮らしの現場にも大臣には来てほしい。さらに、百間排水口問題では撤去から保存を勝ち取った訳だが、大変ご協力を頂いた糸永先生から、水俣病遺跡群の話をして頂きたいと考えている。 (糸長浩司さんの報告：→37p)



■水俣病認定後のランク変更問題\*

**松永** 今、私はBランク。で、昔はよく歩いたり、マウンテンバイクに乗ったりして元気だった。しかし、45~46歳ころからだんだん足の痛みがひどくなって歩けなくなってしまったので、補償協定書に基づいてこれまで4回ランク変更の申請をしたが、却下されてしまった。その理由も曖昧で、いったい何のための補償協定かと思う。今度5回目の申請をするが、今回は慎重に準備してやりたい。もしダメだったら裁判も考えている。昨年60歳となり、とまどいも感じている。やはり患者の納得のゆく補償をして欲しいと思う。

\* 一次訴訟判決を範例としてA・B・Cの3ランクあり、慰謝料額や月々の年金額でAが最も高い。

**加藤** 患者会としても、ランク変更問題は中心課題として取り組んでいる。実は、「ほっとはうす」の頃から運動でカバーし切れない患者たちと出会ってきた。3~4人くらいの小児性、胎児性の患者たちは運動の中では出会って来なかった人たちで、こうした方々が通常に加齢現象では考えにくい40歳代から50歳代の頃、通常では考えられないような身体機能の急速な衰えがあったり、家族も高齢化などでカバーできなくなったり。「ほっとはうす」なら相談に乗ってくれるだろうとやって来た。また、それらの患者の兄弟も濃厚な汚染を受けていて、水俣病と考えてもいいような人が居る実態も見えて来た。こうした人に見えてきたのは、認定はされていても、ほとんどの認定患者が(一番低い)Cランクだったこと。

認定されている人と未認定の人が抱えている問題はどちらも身体と経済的問題であり、同じである。調べてみ



ると現存する認定患者の70%の人がCランクで、これは人が生活してゆけるような補償額ではないと思う。患者は水俣病補償の他に障がい者としての年金制度もあるのだが、そうした情報すら知らずに生きて来られている。そうした患者を家族と地域が支えてきたのだ。ランク変更の申請をしても通らないということがすでに広く知られているので、一般の方々がランク変更に向けて立ち上がれないのは圧倒的な情報不足でありやむを得ないことだった。

昨年、亡くなった渡辺栄一さんのメッセージ「仕事ばよこせ！」にあるように、仕事がなければ暮らせない。渡辺さんは10代で一家7人で裁判に立ち上がり認定されたときのランクはCランク。40代でBランクが認められ70歳で突然死される2年前にAランクを勝ち取った。彼と同じように、一見、歩けるような患者は当時、皆Cランクにされているが、実際には学校に行っても学習が困難だったり、数字が覚えられなかったりして、社会に出ても通常の仕事のサイクルの中で働くことが難しく差別を受け、さらに、経済的困難に直面した。こうした被害が全く考慮されていないのが現状だ。

## ■患者会・Aさんのランク変更申請

加藤 今、私が取り組んでいるのは市内の患者で、配布資料では仮にAさんとしているが、彼は、「金もらっていいね。」と言われたり、孫が差別されたりするのでないかといった差別への恐怖心から、名前を出せないまま。25歳でCランクに認定され、2008年にBランクへの変更が認められ13年後の2021年に著しい健康の低下と身体機能の衰えをきたし、Aランクへの申請をしたが今年1月に2回目の棄却となった。彼は今、まさに厳しい命の最中にあり、自身の人生を振り返り学校で文字(漢字)が覚えられなかったり、計算ができなかった学習障害は水俣病の被害だったのだと自覚している。この水俣病の深刻な被害に対する口惜しさはやはり我慢できないということで、まっとうな償いがされていないとの思いで、現在再々申請をしているところだ。

ランク付け判定を担う公害等調整委員会は、水俣病ではない別の病気のせいだとして彼の申請を再々棄却したが、実は補償協定において、チッソは歯科を除いたすべての疾病の医療費支給を認めている。水俣病は基礎疾患に加えて、あらゆる病を併発するということが前提になっているからこそ、医療費すべてを認めているのだと思う。患者がガンにかかった場合、先端医療の高額医療費もチッソは支払っている。だから、ある症状によってQOL(生活の質)が低下している場合に、これは水俣病の進行であるとして認められないはずがないと考えている。彼の状況については、水俣に謝罪に来た環境大臣にも文書として提出している。

## ■マイクオフ事件後の、伊藤信太郎環境大臣の明言

加藤 「水俣病が解決できない責任は環境省にある。」との大臣の明言もあったのだから、認定制度の過ちを正し、食品衛生法の適用も含めてきちっと原点に戻れば、今ある法律を変えなくても環境省がこの問題を解決できるはずだと思っている。

約20年前の「水俣病に係る懇談会\*\*」で一番議論したのも、この認定制度の問題だった。半年間、期間を延長してまで攻防戦を繰り返したが、認定制度に対する環境省の姿勢を最後まで崩すことができなかった。今もやはり、この原点に帰るべきだと思っている。

\*\* 2004 関西訴訟最高裁判決で国の水俣病責任が確定したことを受け、当時の小池環境大臣の下に設けられた有識者10氏による懇談会。吉井元水俣市長や加藤さんも委員だった。  
詳細な討議記録や提言が環境省のHPに残されている。

## ■患者会メンバーの近況

(画像投影・メッセージ読み上げ)

加賀田清子 「明水園\*\*\*の人たちが早く出て来られたらいいのに。明水園の仲間が心配。コロナを理由にもう5年も出て来られないでいる。困っている人たちのことを考えて下さい。」

加藤 ズームで細々と関わってはいるが、水俣病患者へのコロナ感染を恐れるあまり明水園での著しい人権侵害が5年間も外出と面会が極度に制限されながら、社会的な話題にならない状態が続いている。

\*\*\* 高齢や重症の水俣病認定患者が療養する入居施設。  
1970年代に水俣市が開設



長井勇 「僕を生んでくれたお母さんは、僕が水俣病なのになんで水俣病でなかったのか不思議でならない。水俣病と認められないまま去年92歳で亡くなってしまった。被害者手帳のみだった。僕は以前はひとりでどこでも行けたが、今は行けなくなったのが悔しい。」

加藤 山添友枝さんは、とても無口になっていて。何か一言をと聞いたが「良か、良か」(話さなくていい)。と言われた。エコバッグに必要なひもパーツを作る仕事に熱中する日々を送っている。

今日、体調が思わしくなくて来られなかった永本賢二さんは、支援者の関根さんと宮崎県の土呂久に行ってきた。

加藤 そして、関根さんが“親分”のようにして支える金子雄二さんは、ケアホーム「おるげ・のあ」で生活している。先日、武器で平和は作れないと訴えている埼玉県在住のイスラエル人・ダニーさんの講演が水俣であり、その際に撮った記念写真がこちら(下に掲載)。金子さんは胃ろうなどの厳しい状態だ。気管切開のため、あごの動きで意思確認をしている。

最後に、エコネットでのアート展、水俣遺産サミットに参加したことが報告された。

## ■「おるげ・のあ」で暮らす金子雄二さん近況 追記

加藤 タケ子

金子雄二さんは、障害福祉サービスによる1日/24時間のケア。訪問介護ヘルパーをはまちどり事業所(水俣市)・ユーススタイル訪問介護事業所(熊本市)に派遣してもらっている。

さらに水俣市内のみやざきケアセンター・協立ケアセンター・ニチイケアセンター3カ所の訪問看護事業所の看護師による1日切れ目ない病状観察が行われている。また、医師の訪問も協立病院から2週間ごとに2人の医師(重岡Dr、藤野Dr)が訪問診療を行っている。こちらは、チッソとの補償協定で、医療費として保障されている。地域で患者が暮らす際に生じる福祉的支援は重要で、1日に無制限で利用でき、訪問看護事業者も複数の選択ができる医療は、在宅で過ごす患者にとってはとても安心である。

入浴については、特殊浴槽が望ましく、週に2回、水俣市社協の訪問入浴車(看護師を含む3人のスタッフ)により安心した入浴が2月から確保されるようになった。しかし、この利用はすべて自費で1回に13000円の費用が生じている。本来ならば、水俣市障がい者地域生活支援事業の重度障害福祉サービスの訪問入浴サービスが利用できるのだが、金子さんは65歳を過ぎた時に障害福祉サービスの利用から介護保険サービスに移行することを水俣市から勧奨されていたが、その事をずっと拒んでいる。

なぜなら、日々の生活に多くの身体ケア支援を必要としている金子さんの状態は、幼少期から生まれてからずっとその介助支援を必要としてきた。それは高齢になり介助介護支援が必要になったのではなく、チッソによる公害の被害を母の胎内ですでに受けていたことから発している。

自身の人生のすべてを水俣病を生きてきた。むしろ、公的な支援が乏しい中、家族をはじめ水俣病支援者との豊かな関係を紡いで水俣病を生き抜いてきた。それは、彼の誇りであり自信でありチッソや行政が水俣病の発生拡大の責任をいかに加減にするときに彼の中に怒りがわいてくる。この水俣病を抱え続けるうえで、高齢になったからといって介護保険のサービスに移行するわけにはいかない。本来ならば、医療看護だけでなくすべての介護をチッソは負担すべきである。このことへの主張であり、水俣病患者の存在をどんな時も地元行政も周囲も忘れてはならない。

金子さんは介護保険サービスへの移行をする意志はないので、水俣市には水俣市地域生活支援事業の訪問入浴サービスの利用申請を2月に行った。水俣市は4月に却下通知をよこし、不服があれば行政不服の申請をするように挑みかけてきている。これは、必死で生きてきた胎児性患者に対する非情な恫喝であり国の施策(65歳になったものは障害福祉サービスの利用から介護保険サービスへの移行を勧奨すること)に従わないものに対する圧力とを感じる。今後とも、多くの問題に直面しているが、それは水俣病の福祉の問題、チッソの問題、水俣市行政のありようの問題である。





みんなの力で

スポーツ・環境  
歴史文化都市水俣へ



ひゃっけん はい すい こう

# 百間排水口 周辺を

# 文化財 指定に



## 百間排水口ってどんなところ？

昭和43年までチッソ工場がメチル水銀を含む工業廃水を流した場所で、水俣病が発生した原点と言われています。蒲島知事は「百間排水口は、水俣病の歴史と教訓を後世に伝えるために重要な場所」と話されており、現在は、水俣病学習を目的に年間約35000人が水俣へ訪れています。熊本県の小学5年生は毎年18000人ほどが環境学習の一環として水俣病を学び、学生や大人も必ず見学する場所です。



## 文化財になるとどんなメリットがあるの？

今まで以上に水俣の観光資源になり、百間排水口を見学に来られる観光客のさらなる増加が見込まれ、宿泊・飲食・お土産購入など水俣へ良い影響をもたらすことが期待できます。水俣病の貴重な経験を世界に発信し、世界の人々が健康で安心な生活ができるようにしよう。



travel



多くの人を訪れる「環境学習の聖地・水俣へ」

水俣の歴史的遺構を残す会 代表 加藤タケ子：090-7156-2298

〒867-0051 (きぼう・未来・水俣内)  
水俣市昭和町2-4-8 西田ビル1F